

おわりに

「星の界」という愛唱歌に、「人智は果てなき無窮の遠に・・・」という一節がある。私たちの自然認識・科学認識を振り返るとき、苦さを伴いながら「人智は浅い」という思いを拭うことができない。

全国を揺るがした高度成長期の公害問題を想起しなくても、最高の絶縁体とされたPCB、使用が強く推奨された石綿、使い勝手が絶賛されたフロンガス、夢の素材のはずだったプラスチック・・・などは、後に環境負荷の大きさが強く認識されるようになった。結果として人類の知恵は浅かったのであり、取り返しのつかない事態の修復に、現在も世界中が対策に追われている。「グローバル」という言葉が流行したことがある。現在は、「地球規模の環境問題には、魚沼人は無関係」と無邪気に思い込める時代ではなくなっている。目を背けずに見れば、木材やバナナに代表される農林産物の輸入が、産地の大規模な環境破壊を招き、現地の生活や文化を深く蝕むケースも見えてくる。日本の林業と森林の現況も、見方によっては惨状とも呼べる様相にあり、これらの再生は国を挙げて取り組むべき焦眉の課題とも思われる。

以上のようなことに思いを馳せるとき、魚沼市民、とりわけ今後を担う世代が、地域の自然に触れて自然から学ぶことは極めて重要である。自然は魅力的であり、奥が深く、複雑だ。その営みを知れば知るほど、不思議さも募る。全く同じように見える2種が、調べてみると、かなり異なる生活を送っていることも少なくない。自然を深く知る者は、畏敬の念を覚え、謙虚にならざるを得ない。

IT革命が現実のものとなりつつある今日、私たちは、自らが40億年近い生命の歴史を受け継いできたことを、忘れそうになる時もある。長い生命の歴史は、一度も途切れることなく私達にまで続いてきたし、未来へも引き継がれていくものである。深海、極地、高山までを含め、地球上のほとんどあらゆる場所で、様々な生き物が多様な生活を営んでいる。地球の生物は、すべて私達と共通の祖先から進化してきたものである。遠い近いはあるものの、皆が親戚同士であることも分かっている。そして、地球の生態系の中では物質が循環し、私たちの体を構成している元素は、常に入れ代わっている。体を放れた物質は、また他の生き物の体を作る。この点では、輪廻転生は全くの真実だと言えよう。このように考えると、全ての生き物への親しみと愛しさが増すように思う。

昨年鬼籍に入られた前石沢委員長は、口癖のように次のような話をされていた。「新潟県のどの市町村も、『豊かな緑』を喧伝し、自然環境の保全を謳う。しかし、誇っている自然の実態を把握し、緑の質までを意識している自治体はほとんどない。自然環境の実態、そこに暮らす動植物の生活を知ることが、環境保全の第一歩ではないか」。その通りだと思う。魚沼市の調査も10年余りが経過し、自然の実態が少しずつ明らかになってきた。ある外国の首脳が、「歴史に目を背けるものは現在を誤認し、未来を持ち得ない」という有

名な演説をしたことがある。自然環境についても、同じことが言えるのではないだろうか。現在の自然の実態や環境の変遷を知ることは、よりよい生態系・自然環境を未来に引き継ぐことに不可欠である。本文中にも記述されているが、これまでの調査の成果を振り返り、魚沼市が新たな一歩を踏み出すことを期待する。

2019年3月

魚沼市自然環境保全調査委員会
副委員長 富永 弘

魚沼市自然環境保全事業

平成29年度（2017年度）平成30年度（2018年度）
魚沼市自然環境保全調査報告書

～自然を活かしたまちづくりのための市民参加型調査～

2019年3月29日 発行

編 集 魚沼市環境課環境対策室 TEL 025-792-9766 FAX 025-792-9500

監 修 新潟県立植物園 園長 倉重祐二

魚沼市自然環境保全調査委員会委員 富永 弘

魚沼市自然環境保全調査委員会委員 藤塚 治義

発 行 魚沼市（魚沼市小出島130番地1 〒946-0011）

調 査 特定非営利活動法人 魚沼自然大学

現地調査

○調査員（調査リーダー）

（植物） 武藤光佳 和田齊 貝瀬正俊 小熊敏一 高橋新一 佐藤郁子

井上美知子 田中ミチ子 大原志津子 大桃好子 星澄子 星全倫

（鳥類） 桑原和寿 角屋禮士 佐藤武 桑原哲哉

（両生類） 横山正樹 井口史男 坂大守

（昆虫） 坂大守 横山正樹 井口史男 松浦文子

○市民ボランティアのみなさん

協 力 小出野鳥の会、魚沼昆虫同好会、新潟県立植物園、魚沼市理科教育センター

印 刷 株式会社 アートプリント角越
